

特定非営利活動法人

宮入
慶之助
記念館



宮入慶之助記念館だより 第24号

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館
2017(平成29)年 2月1日発行

〈宮入慶之助博士生誕 150 周年記念特集〉

宮入慶之助 150 年、あれから世界は

名誉館長 多田 功

宮入先生と弟子の鈴木先生が住血吸虫感染には貝がかかわることを発見された時代以降、多くの新しい寄生虫の発見とその感染経路の研究がなされました。日本にはその気候条件から熱帯性の寄生虫が多種類分布していたので、国民保健の観点からその防圧は重要なものでした。マラリア、住血吸虫症、フィラリア症、腸管寄生虫症などが主で、寄生虫学会、保健行政、医療関係者らの努力でこれらを世界に先駆けて防圧出来たのです。

1960年代からは、この成果をもとに日本はアジア、アフリカ、中南米の発展途上国においてODA(政府援助)に基づく保健協力という形で寄生虫防圧を進めました。その象徴的な出来事は1990年代末に橋本元首相によってG7サミットで提案された「橋本イニシアティブ」です。日本が先駆的に成し遂げた寄生虫防圧法を世界に広げようとしたのです。

世界保健機関では人類の発展を大きく阻害する多種類の寄生虫感染を防圧するため失明寄生虫病であるオンコセルカ病、像皮病を生ずるフィラリア症、腸管寄生虫感染などを対象に世界レベルでの防圧を推進してきました。しかし住血吸虫症やマラリアは相変わらず猛威を振るっています。眠り病のようなトリパノソーマ症もアフリカや中南米で流行してい

ます。「億」という単位の人々が現在も病苦に陥っています。

糖尿病、高血圧症、高脂血症など先進国で広く見られる疾患に対する薬剤開発は多くの製薬会社が活発に行なっています。しかし寄生虫病とか、失明を起こすトラホーム、その他のウイルス性疾患に対する薬剤の開発は進んでいません。そのためこれらの疾患は「見捨てられた熱帯病NTD」と呼ばれています。多額の薬剤開発費用をかけても、これらの疾病が流行する地域からコスト回収が困難なためです。今世界保健機関ではこれらNTDに対する重点的な対策を進めていますが、まだ費用も人材も不足です。

現代の人類は宇宙にロケットを飛ばし、遺伝子の解析を成し、驚異的なインターネットと電子機器を構築し、人工知能の開発さえ進んでいます。他方、宗教や文化の違いでテロや戦争を行い、他国を侵略し、人種差別と迫害をしている国や人々が沢山います。このため多量の武器生産のためには膨大なお金が使われています。しかしどの国や地域でも人間が安全に健康に暮らせる社会の実現に使われるお金は乏しい現状です。人類が英知をもって解決を図れるかどうか問われている時代です。

宮入慶之助博士生誕 150 周年記念式典講演より

「日本の住血吸虫病制圧と地球規模での現状：宮入慶之助が果たした役割について」

東京医科歯科大学 教授 / 宮入慶之助記念館 理事 太田伸生

住血吸虫病は体長 2cm 程度の寄生虫が血管の中に寄生してさまざまな病害を起こす感染症です。血管は閉鎖循環系であるために、成虫が産んだ無数の虫卵は毛細血管で塞栓して宿主組織で炎症を起こす結果、肝臓や腸管、脾臓が機能不全に陥って、やがて死に至る経過をたどっていました。かつて日本国内では山梨県、広島県、福岡県などに流行地が存在

して、住民の甚大な健康被害の原因となっていた感染症です。しかし、日本では官民挙げての流行対策事業が展開された結果、1977年に最後の国内感染患者が報告されて以降は感染が確認されず、1996年になって山梨県知事により国内の流行終息が公式に宣言されて今日に至っています。一方で、地球上ではアフリカ大陸を中心として、今日なお2億人を超す感染者があ

り、毎年 30 万人弱の尊い人命がこの寄生虫病の犠牲になっています。

寄生虫病は今日でもワクチンが得られない感染症です。そのために寄生虫病を予防するためには病原体とその感染経路を知って、感染を回避する行動をとることが必要であることは現在も過去と変わることはありません。保健衛生教育が「読むワクチン」といわれる所以です。日本で住血吸虫病の流行制圧に成功したのは、この「読むワクチン」が流行地住民に徹底したことによります。住血吸虫病のための「読むワクチン」とは具体的にどのようなことであろうか？最も重要なポイントは住血吸虫という寄生虫が①どこから、②どのように人間に感染するかということです。この二つの重要課題が日本の研究者によって明らかにされたことにより、住血吸虫病の予防に対する科学的根拠が明らかになって、以降の疾病対策指針が確立したのであります。

「①どこから」を解明したのが宮入慶之助でした。1913年に、当時の九州帝国大学教授であった宮入は、筑後川流域の流行地に散在する体長 1cm ほどの小さな貝に着目し、その貝の中で住血吸虫の幼虫が発育して、やがて人に感染するステージまで成長することを実験的に証明しました。それがミヤイリガイです (図1)。

図1 日本住血吸虫の媒介者ミヤイリガイ



ちなみに「②どのように」は京都帝国大学教授であった藤浪 鑑が広島県内の流行地での野外研究を通じて明らかにしています。この2つの重要な情報が確立したことにより、日本では徹底した流行地住民教育が展開され、やがて国内の流行終息に繋がったのであります。ちなみに日本国内の流行終息は、今日の特効薬であるプラジカンテルの実用化以前に成し遂げられており、このことは日本人の民度の高さを象徴する偉業で

した。流行地住民が積極的に「読むワクチン」の接種(?)に励んだことを物語っています。

感染症流行成立には病原体と感染ルートの存在が必要です。それぞれの解明が人類にもたらした福音は計り知れません。そのために重要な熱帯寄生虫病であるマラリアについては、病原体の発見者と、それを媒介するハマダラカの役割を解明した研究者がノーベル賞を受賞しています。住血吸虫病も特効薬プラジカンテルの出現まではマラリアと並ぶ恐ろしい熱帯寄生虫病でした。病原体の発見は 1851 年のビルハルツ博士であったが、ノーベル賞発足時にはすでに故人であったため受賞していません。ノーベル賞は故人には授与されないからです。宮入慶之助が住血吸虫の媒介者であるミヤイリガイを発見したのは 1913 年であり、その偉業により 1927 年のノーベル賞候補として推挙されたが、受賞には至りませんでした (表1)。

もともとノーベル賞は白人研究者に授与するものであるという不文律が存在したことはよく知られており、北里柴三郎や野口英世も受賞に浴することができなかったが、宮入の業績もそれに劣ることはありませんでした。20 世紀前半にノーベル賞候補者としてノミネートされた日本人研究者は決して多くなかったのです。

さて、宮入の発見をもとに、日本国内の流行地ではどのような対策事業が展開されたのであろうか？すでに述べたように、対策戦術は「読むワクチン」の徹底です。宮入の発見後、5 年も経たないうちに山梨県では小学校で使う副読本が編纂され、学校の教師が児童に指導しました。これはなかなか美しいカラーイラストの教育資料で、今日感覚から言っても第一級の「読むワクチン」であります (図2)。さらに日本の住民組織の特徴である「隣組」を活用して、農地のミヤイリガイを駆除する活動が行われました。「読むワクチン」の徹底度がどれほどのことであったかは、山梨県が 2001 年に実施した住民

表1 マラリアと住血吸虫病の病原体および媒介者発見の歴史

疾患	患者数	病原体	媒介者
マラリア	6-7 億人	マラリア原虫	ハマダラカ
		ラザラン* (1880 年)	ロス* (1902 年)
住血吸虫病	約2億人	住血吸虫	ミヤイリガイ
		ビルハルツ (1851 年) ※日本では桂田富士郎 (1904 年)	宮入慶之助** (1913 年) ※アフリカではヒラマキガイ

* ノーベル賞受賞者 ** ノーベル賞候補に推薦されたが…

図2 一九一七年編纂の山梨県の小学校用副読本



の意識度調査では、住民の90%以上が住血吸虫病を認知しており、特に感染リスクが高い農民で徹底していることが示されています。そのような正しい知識と

行動を徹底する指針の基となったのが宮入慶之助の発見であったことは言うまでもありません。

日本が住血吸虫病の流行制圧に成功した一方で、アフリカなど熱帯地方の多くでは流行対策が著しく立ち遅れています。今日なお、2億人以上の感染者が確認されているのが実情であります。宮入慶之助の発見を受けて、アフリカの流行地でも、そこで流行している住血吸虫の媒介者が同定され、それぞれの流行地に即した「読むワクチン」が確立されているにも関わらず、です(図3)。アフリカで住血吸虫病対策が進ま

ないことにはさまざまな要因が考えられます。住血吸虫病は水中で感染します。水が人の生活にとり不可欠なものであることから、上下水道の整備なしには住血吸虫病の流行制圧はできないのだという議論もあります。しかし、日本は少なくとも下水道整備がない状況で住血吸虫病流行を制圧することに成功しています。アフリカに対する日本からの保健衛生領域のさまざまな技術支援の中で、住血吸虫病対策は大きな比重を占めてきました。何よりも日本は住血吸虫病の流行国であったし、その流行制圧に成功した世界で唯一の国だからです。日本の経験をどのように現地に即した形で伝えていくかが大きな課題であります。

今、世界は住血吸虫病の流行制圧に向けて大きな動きの中にあります。WHO世界保健機構では住血吸虫病流行制圧に向けて具体的な行動目標を掲げるようになりました。2020年、即ち東京オリンピックの年までに多くの流行地で根絶を目指しています。困難は大きいですが、その目標達成を現実のこととしてWHOがアピールする一番の根拠は日本での流行制圧の成功であり、それを導いたのは疑いなく宮入慶之助のミヤイリガイ発見によります。宮入慶之助がもたらした科学的根拠が世界に健康と福祉をもたらそうとしていることを日本人は誇りとして良いのではないのでしょうか。

図3

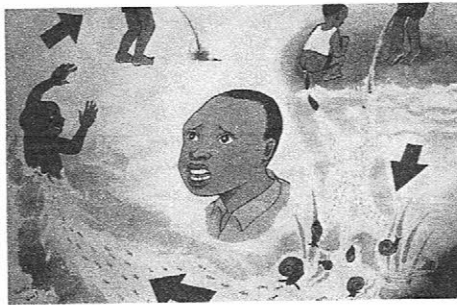


図3 アフリカの流行地に配布した教育用の紙芝居

当館のあゆみ

1980年代、宮入耕一郎(当時、長野県篠ノ井農業協同組合長)は妻スワの叔父である宮入慶之助の業績や家に伝わる資料について強い関心を持っていました。九州大学医学部寄生虫学教室(当時)や直系親族などを訪問したり問い合わせをして資料の収集を手掛けていました。1991年(平成3年)に多田 功氏(当時は熊本大学教授、現在は当館名誉館長)の訪問を受けたり、小林照幸著「死の貝」が発刊されたりしたことを契機に記念館の設立を考えるようになり長男源太郎、長女キイ、次男錦次郎、三男建三などが協力して1999年(平成11年)に宮入慶之助記念館として開館、初代館長に耕一郎が就任しました。2001年(平成13年)に耕一郎が他界し源太郎が館長を引継ぎ現在に至っています。開館当初は任意団体としてスタートしましたが、2008年(平成20年)にNPO法人化して現在に至っています。

当館の現状

開館当時考えたことは、このような活動を末永く継承するためには背伸びせず、身の丈に合った規模・内容で進めようということでした。このことから、記念館の建物は慶之助の甥にあたる清太郎夫妻が住んでいた空き家(1969年築、平屋、床面積67㎡、間取り3DK)を改装して使うこととしました。開館してから17年、鉄板屋根の塗装、内装改装、電気配線取替などを業者に依頼しましたが、板壁補修塗装や展示パネル制作、内装補修などは会員の共同作業で、ガラスケースなどはリサイクル品を使っています。

展示施設としての現在の諸元は、展示室 5、収蔵庫 1、トイレ・洗面所、収容人員は最大20名程度、駐車スペース 3台、開館は電話またはメールの予約により随時開館、入館料は無料、日常管理は館長が事務局兼務で担当しています。

展示品および収蔵品については、開館当初はカイや日本住血吸虫の標本、慶之助ゆかりの品や書籍・写真類等が中心でしたが、日本住血吸虫をはじめとする関係の研究者の方々のご支援により関係の専門書、文献、画像、写真などが集まり、現在では筑後川流域や片山地方、山梨県等の主要流行地帯での撲滅対策の歴史についての資料が揃いました。また、カイの生態を説明したパネルや人体内の虫卵の様子の超音波写真、虫の幼虫がカイに侵入する状況を記録した動画、撲滅対策史についての記録映画なども加わりました。

また、一般観覧者や子供さんのために、初代館長一家に所蔵されていた昭和前半時代の食器、衣類、台所用品、ラジオ受信機コレクションなどの展示も追加しました。

空き家を改装して、展示施設として必要な設備を少しずつ増強し、小さいながらもお客様を迎える体制を整えてきました。

現在では、電話・ファクシミリや冷暖房機、DVDプレーヤ、ビデオプロジェクタ、パソコンなどを設置しています。また、照明等の電気料を節約するために記念館建物の屋根に太陽光発電パネル(3.6KW)を設置しました。

当館周辺の環境と立地は、長野市街地から南に約6kmの位置にあり、交通の便はJR長野駅善光寺口から路線バスで約20分、上信越自動車道長野インターから車で約3分の位置にあります。県道長野真田線に近く、近くにドライブインと蕎麦レストランがあり、館の西側には田園地帯が広がっています。

事業内容は、展示室での展示と機関誌の発行を中心としています。

展示室では我が国の日本住血吸虫症撲滅の歴史および宮入慶之助の生い立ちと業績、昭和時代の生活用品などをテーマに説明パネルとゆかりの品物を展示しています。

機関誌は「宮入慶之助記念館だより」を2001(平成13)年に創刊し、今回で24号になりました。

この他に東京医科歯科大学、国立科学博物館、長野市立博物館、九州大学、信州大学、篠ノ井病院などで共催展示を開催してきました。

当館の今後について

まずは最大の課題は当館の存続のための資金の確保です。初代館長の残した基金は減少を続けており対策が必要です。正会員・賛助会員含めて約90名の会員数を

200名位にしたいと思います。その他に個別の募金活動や入館料の検討なども考えていますが、当館への寄付が税制上の優遇措置である「寄付金控除」が適用できる認定NPO法人になれるよう認定取得の活動を進めます。

次に、宮入慶之助の業績と日本住血吸虫症撲滅の歴史を伝える当館所蔵史料を確実に後世に伝えるための保存・整理のレベルを向上させなくてはなりません。いままでは寄贈・収集された史料を集めただけでした。モノ・書籍・印刷物・写真・カセットテープ・CD・DVDなどを整理してリスト化し、記録媒体ごとに長期の保存や使用に耐える環境をつくらねばなりません。専門家の指導をいただきながら努力をしたいと思っています。

電子的な記録媒体は媒体そのものの保存だけでなくそれらの再生のための機器の保守や新しい媒体への書き換えも必要です。技術の動向も見据えての対策を進めます。

記念館建物を維持するための保守・修繕と周辺美化も定期的に行うよう組織化を進めます。

記念館の基本は展示パネルと展示物の配置につきると思います。開館以来、見様見真似でやってきましたが、これからは専門家の指導も受けながら分かり易さや興味深さを追求して展示の質を向上させる工夫と努力を続けたいと思います。例えば顕微鏡を使った観察、生きたカイの展示、人体内での原虫や虫卵の様子や幼虫の変化の様子などの画像や動態映像展示、大量に生息するカイの現場写真の展示などを考えています。

展示内容の充実のためには、収集品だけの範囲ではなく特定なテーマを意識しての調査・研究が必要だと思っています。例えば、士族とはいえず武士や富裕な家系でもない慶之助がなぜ東京の大学に進学し卒業できたのか、日本では日本住血吸虫症は患者ゼロになったが宮入貝はゼロになっていないがこのままで良いのだろうか、現在でも海外では約2億人の患者が苦しんでいるがこのことはどう考えれば良いのだろうか、卵から出た住血吸虫の幼虫が周囲の生物には目もくれずになぜあんな小さな巻貝にだけしか侵入しないのだろうかなどのテーマが考えられます。

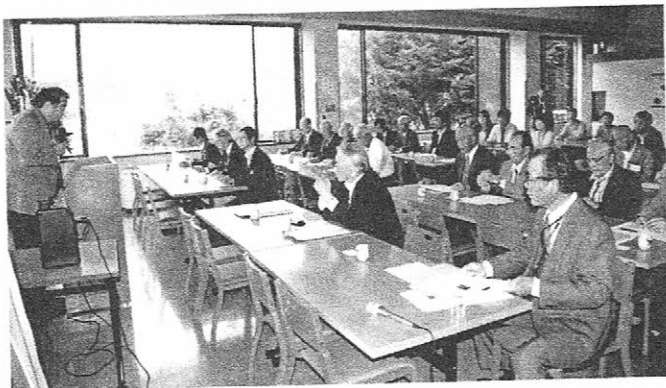
最後に、慶之助が生まれて育った長野市篠ノ井西寺尾に立地しているからには、郷土の市民に親しまれる施設になりたいと思います。学校や公民館などでの出前展示、地元の祭やスポーツ大会、公民館活動、グループ活動などへの協賛等親しまれる施設になるための模索を続けていきたいと思っています。

1865(慶応元)年	5月15日現在の長野市松代町西寺尾に生れる
1868(明治1)年	明治維新
1880(明治13)年	15歳 上京、東京大学予備門に合格
1881(明治14)年	山梨県で、県令に難病の原因究明を訴える「御指揮願」
1890(明治23)年	25歳 東京帝国大学医学部卒業、同大学衛生学教室助手
1891(明治24)年	26歳 京都府医学校教諭
1892(明治25)年	27歳 志ゆんと結婚
1895(明治28)年	30歳 第一高等学校教諭
1897(明治30)年	32歳 山梨県の患者杉山なかは自らの「解剖願書」を出し、解剖実施さる
1898(明治31)年	33歳 万国衛生及びデモクラフィー会議(於スペイン、マドリッド)に政府委員として参列、臨時検疫事務官兼内務技師
1899(明治32)年	34歳 衛生局防疫課長、警察監獄学校講師
1900(明治33)年	35歳 日本薬局方調査会幹事、兼臨時検疫局技師、衛生局防疫課長代理
1902(明治35)年	37歳 衛生学研究のためドイツへ留学
1904(明治37)年	39歳 帰国(8月)、京都帝国大学福岡医科大学教授、衛生学講座担任
1905(明治38)年	40歳 藤浪 鑑、桂田富士郎ほぼ同時に寄生虫を発見、日本住血吸虫と命名
1910(明治43)年	45歳 九州帝国大学医科大学教授(京都帝国大学福岡医科大学から改組変更)
1911(明治44)年	46歳 妻志ゆん病没
1913(大正2)年	48歳 助手の鈴木 稔とともに、筑後川流域で中間宿主貝を発見
1914(大正3)年	英国の学者レイパーとアトキンソンが来日し中間宿主確認 その後マンソン住血吸虫、ビルハルツ住血吸虫の中間宿主貝も発見
1916(大正5)年	51歳 ナヲと再婚
1918(大正7)年	広島県の9村に地方病撲滅組合が結成
1919(大正8)年	54歳 欧米各国へ出張(8月)
1922(大正11)年	57歳 勲二等瑞宝章受章
1923(大正12)年	58歳 ロックフェラーの招請によりアメリカ及びカナダへ出張 日本で治療薬スチブナール開発
1925(大正14)年	60歳 九州帝国大学退官、同大学名誉教授
1928(昭和3)年	63歳 勲二等旭日重光章受章
1930(昭和5)年	65歳 東京へ転居
1931(昭和6)年	寄生虫予防法制定
1942(昭和17)年	77歳 福岡へもどる
1945(昭和20)年	太平洋戦争終戦
1946(昭和21)年	4月6日老衰にて死去、満81歳
1950(昭和25)年	田畑の溝をコンクリートで固める試みが開始
1957(昭和32)年	日本住血吸虫対策10年計画開始
1977(昭和52)年	ドイツで特効薬ブラジカンテル開発
1990(平成2)年	筑後川流域宮入貝撲滅対策連絡協議会が安全宣言
1991(平成3)年	広島県環境保健部が「日本住血吸虫症流行終息報告書」を発行
1996(平成8)年	山梨県知事、流行の終息を宣言
1999(平成11)年	宮入慶之助記念館開館
2000(平成12)年	筑後川流域宮入貝撲滅対策連絡協議会が宮入貝の根絶を宣言して解散
2003(平成15)年	日本寄生虫学会「日本住血吸虫発見100年記念国際シンポジウム」開催
2016(平成28)年	宮入慶之助博士生誕150周年式典開催

宮入慶之助博士生誕 150 周年記念行事の開催

カイ発見 100 周年記念事業がほぼ完了した平成 26 年に、宮入博士の生地長野市西寺尾地区に在住する会員の中から次は生誕 150 周年記念行事をやるという声が上がりました。

博士の誕生日は慶応元年(1865年)5月15日ですから、平成 27 年(2015 年)は生誕 150 年になります。郷土出身の世界的学者の生誕 150 年を地元の人々と顕彰するのは意義あることなので館長とともに企画案をまとめて平成 27 年度の総会に提案し、記念式典を 10 月 17 日に設定し具体的な計画と準備作業が開始されました。ところが 8 月 8 日夜に館長が打合せ後の帰宅途中で右足を骨折して入院するという事件が発生しました。しかし、入院中の館長とは連絡がとれる状況だったので地元在住の会員による実行委員が準備作業を進めましたが、9 月 11 日に病院の面会室にて実行委員が集まったの会議で館長より回復は順調ではあるがリハビリの長期化が予想される状況で計画は断念したいとの提案があり中止になりました。年が明けて平成 28 年初頭に実行委員の熱意と杖をついての外出や 2 時間程度の事務作業は可能との館長の現況に基づき 2 月 22 日にインターネットによる理事会で中止していた記念行事の実施を提案し、以下のような内容で準備作業が再開されました。



監事就任のご挨拶

平成 28 年 6 月の総会において宮入慶之助記念館の監事に選出されました。

私は当地長野市篠ノ井西寺尾に生まれ、農協勤務などを経験しながら農業者として現在まで過ごして参りました。日頃宮入館長にはお世話になっていることから、平成 25 年 10 月に入会させていただいたのですが、そこで記念館の積極的な活動を知りました。

1. 記念式典

日時 平成 28 年 6 月 4 日(土) 午後 3 時より 5 時まで
会場 「信州そば蔵」長野店 長野市篠ノ井井瀬副合 7-1
式典・基調講演

「日本の住血吸虫症制圧と地球規模での現状」

講師 太田伸生 (東京医科歯科大学教授・
日本寄生虫学会前理事長・当館理事)

・講演「宮入慶之助記念館の現状と今後」

講師 宮入源太郎 (宮入慶之助記念館理事長)

・懇親会

2. 記念展示

宮入慶之助記念館にて特別展示開催

式典へは当館周辺の住民、地域の長老、行政・学校・医療など関係機関のトップの方々約 60 名に招待状を発送しました。

当日は天候もまずまずで 41 名の出席者を迎え、定刻より式典が始まりました。まず館長挨拶により開始、長野市篠ノ井支所長宮澤 博氏の祝辞、太田伸生氏と館長の講演があり、続いて懇親会が開始され、長野市川中島公民館長山口 明氏の乾杯音頭、当館名誉館長の多田 功氏と宮入慶之助の孫である宮入聰一郎氏よりスピーチをいただき和やかな歓談のひとつときを過ぎ、午後 5 時に館長の音頭で万歳を三唱して終了しました。

この事業を企画してから 2 年がかりのイベントでしたが、地元新聞にも報道され出席の来賓の方々からも暖かいお言葉をいただき、実行担当の会員も感無量でした。

ご多忙にもかかわらずご出席下さった来賓の方々、講演会と懇親会を短時間で設営するという難しい要求に対して献身的に対応していただいた会場の信州そば蔵の方々、会員の方々に厚くお礼申し上げます。(会場写真提供;信濃毎日新聞社)

監事 小山 信

初代館長ご一家とは私の両親の時代からお付き合いさせていただいており、慶之助博士のことも子供のころ母から聞いておりました。

そんなご縁もあり、微力ではありますが特定非営利活動法人宮入慶之助記念館の活動が適正に運営されるようお手伝いしたいと思っています。よろしく願いいたします。

記念館活動記録(平成28年4月以降)

□6月4日、「信州そば蔵長野店」にて平成28年度通常総会が開催され、平成27年度の事業報告、同収支決算、28年度の事業計画、同役員が承認・可決されました。平成27年度の収支は、前期繰越1,160、収入914、支出783、次期繰越1,160(数字単位はいずれも千円)でした。役員は川野登監事が退任、小山信会員が監事に就任しました。会員状況は、正会員34名、賛助会員56名です。

総会で承認された28年度役員はつぎのとおりです。

理事長 宮入 源太郎
理事 多田 功
理事 太田 伸生
理事 小山 義夫
監事 柳澤 紘
監事 小山 信

□6月4日、「信州そば蔵長野店」にて宮入慶之助博士生誕150周年記念式典が、3日から8日まで記念館の特別開館が行われました。(式典詳細は前出のとおり)

□7月23日から8月31日まで、平成28年から国民の祝日「山の日」(8月11日)が制定されたことを記念して特別展示を開催しました。これは長野県主催の「信州とあそば!」信州ミュージアム・ネットワーク事業に参加するもので、東京の目黒寄生虫館の支援をいただき、生きているヤマビルとマダニを展示、山



(特別展示写真)

にいる寄生虫についての説明パネルとともに登山する場合に注意するという視点も必要ではないかと企画したものです。山にいる寄生虫のことは知っているが生きているのを見たいと来館される方も多く、人間の呼気に反応してガラスビンの中でヤマビルが乱舞するのを見て喜んでおられる様子を企画して良かったと思いました。ご支援いただいた目黒寄生虫館に厚くお礼申し上げます。

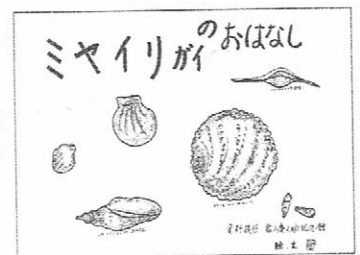
□10月2日、記念館所在地区の岡神明神社の秋祭りに協賛し、お神楽の訪問と獅子舞の奉納、子供神輿の来訪をいただきました。

□11月26日、松本市内「泉岳」にて理事会を開催、理事長の健康回復後の問題と対策につき討議しました。

□12月1日、長野市立篠ノ井東小学校の6年生(2クラス)の授業にて、篠ノ井地区の読み語りグループの人たちによる紙芝居「ミヤイリガイのおはなし」が上演されました。

これがきっかけで翌日2日に同校の6年生一行約70名が記念館見学に来館されました。

一度に70名の見学は、開館以来初めてのことで、地元在住会員の支援をいただきながら対応しました。この紙芝居は、当館会員の丸山イツヨさんが当館の資料と展示をもとに約3年かけて手作りされたもので、完成した4組の内1組を当館に寄贈いた



(紙芝居表紙)

いただきました。丸山さんはじめ読み語りグループの皆さまのお陰で、郷土の学校のお役にたつことができました。お礼申し上げます。

寄贈品紹介

□宮入慶之助の手紙

平成28年10月に目黒寄生虫館のご好意により、慶之助から松代町出身の祖父である倉田省三にあてた手紙が発見されたので寄贈したいとの連絡をいただきました。

孫であられる石井順子様との連絡がとれて、故人の家系について調べた本(倉田正一著;倉田家物語)とともに額入りの慶之助から倉田省三氏あての手紙

が送られてきました。手紙の内容は倉田氏が転勤になるとの手紙を送ったことに対する昭和11年9月付けの礼状と判読されましたが、手紙を額に入れて大事にしていたということから特別な関係があったと推測されるので当館としては大事に保管するとともに慶之助についての知られざるエピソードとして調査を進めることとしました。

訃報

甲府市立甲府病院神経内科元科長で当館会員であられた林 正高さんは平成 28 年 9 月 10 日永眠されました。当館を開設する時に林さんを訪問してご指導いただき、その後も機会あるごとに資料の寄贈などご支援いただきました。

日本住血吸虫症患者の肝臓の超音波断層写真など多くの資料が現在も展示されています。我が国の日本住血吸虫症制圧など長年にわたり多大な貢献をされた林さんのご冥福を心よりお祈りいたします。

会員入会へのお礼 (順不同、敬称略)

(会員) 宮沢英夫、藤木 篤

ご支援へのお礼 (順不同、敬称略)

次の方々からご支援をいただきました。厚くお礼申し上げます。

[寄金] 行本達雄、多田 功、太田伸生、宮尾美里、宮尾芳男、宮澤盛人、石井順子、清永 孝、
秋山文夫、星野 清、丹羽保明、本橋和夫、小野 渉、福田初江、小島夫美子、湯田久美子
[寄贈] 石原あえか、小林照幸、藤木 篤、福山市医師会 [周辺美化] 宮入昭夫

新規会員募集

私たちは、宮入慶之助の業績を後世に伝えると共に、ミヤイリガイを駆除し日本国内を日本住血吸虫症から安全な状態に導いた先人の努力の歴史を末永く伝えることを目標に、記念館の維持・運営、資料の保存・展示・説明・調査・収集、機関紙の発行、展示会・講演会の開催などの活動をしています。

このような活動に参加またはご支援いただける会員を募集しています。

会員種別は以下の通りです。

正会員 当館の活動に参加またはご支援いただける方 年会費 3,000 円

賛助会員 当館の活動に財政的にご支援いただける方 年間 3,000 円以上のご支援

ご希望の方は、電話・手紙・FAX・Eメール(アドレス gmiyairi@triton.ocn.ne.jp) いずれかの方法で事務局までご連絡ください。入会申込書と振り込み用紙をお送りします。

編集後記

□ やっと 24 号が発行できました。皆さまからの「ゆっくりやろうよ」、「健康が何より大切だから」とのお言葉に支えられてようやく原稿がまとまりました。とはいえ、遅れは遅れですので会員の皆様にお詫びするとともに、今後の体制について対策を進めたいと思います。

□ 本号は昨年 6 月の宮入慶之助博士生誕 150 周年の記念特集号としました。

太田理事には、何かとご多忙の中を記念式典での基調講演の内容をとりまとめて執筆いただきました。慶之助の功績を末永く顕彰していくためには、活動の基本シナリオが学術的に検証されている必要があります。記念館の展示や説明はわかり易くかつ興味深く、できればドラマチックにしたいものです。功績を強調するあまりつい話を誇張してしまうようなことが無いよう

に心掛けています。学会の権威であられる太田理事の基調講演の内容は、今後の活動のための貴重な原典の一つとして残しておきたいと思います。

□ 編集子の周辺の健康問題で記念館活動に遅れが生じてしまいましたが、対策の見通しをつけつつあります。皆さまのご寛容と引続きのご支援をお願い致します。

宮入慶之助記念館だより 第 24 号

発行者

特定非営利活動法人 宮入慶之助記念館

編集者 宮入源太郎

〒388-8018 長野市篠ノ井西寺尾 2322

Tel&Fax (事務局) 026 (293) 3828

(記念館) 026 (293) 4028

ホームページ <http://miyairikinenkan.com/>

発行日 2017 (平成 29) 年 2 月 1 日